

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2016年1月14日

47号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



*** 【 ドイツ人少女フルートカルテット”FluTeens” のメンバーたち 】 ***

1. ハイマート 47 号に寄せて (会長のことば)	2
2. 「若手会員の集い」に参加して	3～4
3. 「フルーティーンズ」演奏会	5
4. エアフルト独日協会員のホームステイ	6～8
5. 独俳 (ドイツ語で俳句) (連載 - 2)	9～10
6. 北軽井沢での楽しい親睦会	11～12
7. デザイナー修行奮闘記 (連載 - 7)	13～14
8. 今後のイベントのお知らせ	15

1. 会長挨拶

会長 鈴木克彬

日本とドイツ “持ち味・共通点” を再確認

・・・群馬テレビのコメンテーターを経験して・・・

群馬テレビからの依頼で約4年間、月に1回、夕方18時からのジャストニュースの時間帯で、テレビのコメンテーターをさせていただきました。出演の際のテレビ局からの要望は、ぐんま日独協会の会長として、“両国の特徴や持ち味等を県民の方々に紹介して欲しい”ということでした。そこで私なりに過去の訪独経験を参考に、毎月テーマ決めてコメントすることとしました。

番組をご覧になった方もいらっしゃると思いますが、放送でコメントしたテーマのいくつかを纏めてみました。

会員の皆様はどのように思われるでしょうか

◎ 相違点として紹介したテーマの事例

- 1 握手するドイツ人 お辞儀する日本人
- 2 自己主張の強いドイツ人 和をモットーとし、穏やかさを好む日本人
- 3 こだわり、根拠を重んじるドイツ人 誠意等ハートを重んじる日本人
- 4 伝統、古いものを大切するドイツ人 改革、新しいものを好む日本人
- 5 ルール通りで融通性がきかないドイツ人 サービス精神旺盛な日本人
- 6 仕組み作りの上手なドイツ人 仕組み 決定等に曖昧さが残る日本人
- 7 大きく頑丈なものを好むドイツ人 コンパクト・小型化を好む日本人

◎ 共通点として紹介したテーマの事例

- 1 几帳面で勤勉な両国人、約束を大切に守る。
- 2 向学心が強く、研究開発力が旺盛。
- 3 創造力があり、産業立国
- 4 とともに自然景観がすばらしい。 自然に対する畏敬の念がある。
- 5 相手の文化に関心を持ち、相互間の理解、吸収力が素晴らしい。

◎ ドイツで好評な日本文化を紹介した事例

- 1 ドイツで評判、マンガとアニメ・・・独訳本が駅売店や本屋さんに陳列
- 2 日本レストラン、特に寿司店は乱立気味
- 3 日本庭園は、有名都市に殆んど存在。 また盆栽に関心のある人も多い。
- 4 空手・柔道の道場は、ドイツの方が日本より多いかも・・・

以上

2. 「若手会員の集い」に参加して（日向 泰史 記）

2015年（平成27年）9月23日（水・祝）に、全国日独協会連合会主催の「若手会員の集い」に参加を致しました。ドイツ大使公邸での「秋祭り」も同日開催されましたが、残念ながら参加は出来ず「若手会員の集い」のみの参加となりましたが、全国の日独協会の方々にお目にかかる事が出来、非常に貴重な機会でした。

1. 参加各協会の現状及び活動報告

今回参加された全国14協会からの現状及び活動報告がされました。各協会共にドイツに関連した行事を精力的に行っており、大変参考となりました。一方で、若手会員の現状については、各協会で大きな課題として認識が持たれていました。特に感じた事は、都市部と地方の協会での若手会員数の差が非常に大きい事で、地方協会での若手会員確保に苦慮している現状がよく分かりました。

ぐんま日独協会では、毎月第一土曜日に開催しているドイツサロンへ若手会員の方々も参加をして頂いておりますが、若手会員数を増やすべく”草の根運動”を行っていきたいと思っております。

2. 日独青年交流団体新規設立について

一昨年に協議され賛同を得た「日独青年部」（仮）の設立について、具体的な協議が行われました。実行委員より「青年交流団体設立についての提案」という題でパワーポイントでの説明があり、この内容に対しての賛否を取りました。また、各協会に同内容を持ち帰って協議する事となり、ぐんま日独協会においても、定例のドイツサロン並びに11月28日の軽井沢グリーンプラザでの懇親会にて、協議をさせて頂きました。

ぐんま日独協会の案としては、特に学生らの若手会員の「裾野を広げる」べく、ホームステイの支援は出来ないか？という事について考えています。特に学生に短期でのホームステイに参加をしてもらい、そのサポートをぐんま日独協会で行えないか？というアイデアです。

背景としましては、昨年8月に開催されたドイツの学生フルート演奏グループFluTeensの演奏会（★編集者註：FluTeensについては第3項に関連記事があります）後に、前橋市内の高校生とFluTeens4名の演奏者で交流会を行いました。最初はお互いに緊張していたようですが、段々と打ち解けて最後には写真を撮り合ったり、メールアドレスの交換を行っており、非常に盛況な会となりました。高校生にとっては、恐らく初めてのドイツ人学生であったろうし、FluTeensの4人にとっては初めての同世代の日本人との交流であったろうと思いますが、彼らにとっては大変貴重な思い出になったものと思います。

こういった国際交流の場を、これまでぐんま日独協会でも支援をしていたホームステイをベースとした日本とドイツの文化交流を交えて、若手会員又は学生達に機会を提供し、これをきっかけにドイツや海外の国々の文化に興味を持ってくれたら、と考えております。

まだ構想段階であり、特に費用の面での運営方法など具体的に検討すべき項目は多くありますが、会員の皆様からのご意見を頂きながら、実現に向けての協議を引き続き行っていければ、と思っております。



【ぐんま日独協会における日独若者交流として考えられる例
－ FluTeens と前橋の高校生との交流風景 －
これを発展させた相互ホームステイなども考えられる】

3. 「フルーティーンズ」演奏会 (原鏡記)

2015年8月25日(火)前橋市中央公民館3階ホールに於いて、ドイツの少女によるフルート四重奏「フルーティーンズ」のコンサートが開催されました。このコンサートは現在ドイツを中心にポーランド、スイス、オーストリアなどで演奏活動を行い、また様々な音楽学校でフルートの講師を務めていらっしゃる、福井茂子さんのお弟子さん4人によるフルート・アンサンブルでした。15～19才というティーンエイジャーの4人のうちの一人が卒業されるとのことで、その記念に「Goethe Institut」より助成を受け、福井先生の母国である日本を訪問するという企画だったそうです。前橋の他にも各地でコンサートを行い、当日は金沢より午後1時頃前橋に到着、休む間もなく打ち合わせ、リハーサル、5時から約2時間の本番、終演後は高校生との交流会、その後さらに日独協会の懇親会・・・と、ハードなスケジュールをこなし、アパ・ホテルに宿泊、そして翌日9時には黒部ダムに向かって前橋を後にしました。

このコンサートは、ぐんま日独協会の主催、前橋市教育委員会の後援と前橋市中央公民館の協力を頂き、平日の夕方5時開演というコンサートとしては決して良い条件ではなかったにも関わらず、大勢のお客様がご来場下さり盛会のうちに無事終わりました。モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」や、ビゼーの「アルルの女」などお馴染みの曲に加え、初めて聴くマッキー作曲の「ジャズ組曲」、また「となりのトトロ」や「君をのせて」などジブリの音楽も演奏して下さり、フルート・アンサンブルの魅力を堪能させていただきました。



コンサート後の交流会は、海外研修から帰国したばかりの市立前橋高校の学生さんと県立前橋高校の学生さんも参加して下さり、クイズや歓談でなごやかな時を過ごし、最後には一緒に写真を撮ったりメールアドレスを交換して別れを惜しんでいました。ぐんま日独協会より記念品として歌舞伎などにも使われる桐生の織物の布、そして中央公民館の内田さん、松本さんのご尽力により、前橋市のキャラクター「ころとん」のグッズもプレゼントさせていただきました。



音楽による若い人達の交流に日独協会の明るい未来を感じることができ、大変有意義な一日でした。福井先生、フルーティーンズの皆様、ご協力下さいました関係者の皆様、本当にありがとうございました。

4. エアフルト独日協会員のホームステイ (平方 順子 記)

私達は先日ドイツ・エアフルト独日協会の紹介で、ドイツ人カップルのホームステイを受け入れました。

トーステン・クライスルとマルチナの二人で、年齢は共に32歳、9月8日(火)～25日(金)の18日間の日程で来日しました。その間、東京(2泊)・群馬(5泊)・京都(3泊)・鎌倉(2泊)・東京(4泊)の順で日本を楽しむ計画でした。来日前の通信では京都から広島へ足を延ばす希望を持っていましたが、丁度日本ではシルバーウィークの真っ最中で広島の宿を予約することが出来ず、残念ながら計画変更を余儀なくされていました。

私達の家には2泊、そして日光に同行し鬼怒川温泉に1泊、トータルで3泊4日のお付き合いになりました。

第1日(9月10日)。

夕方、前もって約束した通り高崎駅へ二人を迎えに出ました。高崎駅で合流した時の印象は、若くてとても爽やかだなという感じでした。それと同時に彼らの荷物の大きさに驚かされました。スーツケースではなく、大きなリュックサックと小さなリュックサックを持っていました。大きな方を背負い、小さな方を前に抱くような形でした。その姿は前と後ろに荷物という奇妙なものでしたが、両手がしっかりと使えることはメリットかもしれません。

早速その足で、夕食として予定していた回転寿司に直行して、4人で自己紹介をしながら、日本の寿司を楽しみましたが、疲れからかマルチナは余り食欲が無い様子でした。2皿しか食べず少々心配しましたが、全体的に食が細いことが後に分かりました。群馬に来る前、東京で既に回転寿司は経験済みだったようです。トーステンは美味しいと言いながら普通に食べていました。

我が家に着く頃にはすっかりお互いに打ち解けていました。豪雨の為、予定していた電車に乗れなかったりして、疲れていると思い入浴後すぐ休んでもらいました。

第2日(9月11日)。

鈴木会長さんに案内していただき、前橋市富士見町の須田さん、書上さんという、盆栽を沢山仕立てられている方のお宅を訪ねました。2軒とも広い敷地に50年位かけて作られた立派な盆栽が所狭しと並んでいました。黒松、五葉松、曾呂、皐月、楓、紅シタン等々。十代から盆栽を始めたとあって、トーステンは盆栽の種類や仕立て方等かなり本格的な知識を持っていました。

いろいろな形の植木鉢、その中に大切に何十年もかけ仕立てられた植物。1作品の中に森や林等の自然を表現するといわれますが、実際に美しい盆栽を前にして、改めて日本の盆栽の素晴らしさを感じたトーステンだったと思います。二人にとってこの訪問は大変有意義だったようです。



その後、赤城大沼、三夜沢の赤城神社を案内し、群馬の山を楽しんでもらいました。

その夜はゆっくりしてもらうために、2～3日前から仕込んでおいたおでんの夕食を食べて頂きました。夕食後、彼らが京都・伏見稲荷の見学をとても楽しみにしていたので、以前に録画しておいた番組を見ながら夫が説明をしました。

第3日（9月12日）

栃木、茨城に大きな被害をもたらした豪雨直後の日光行。

草木ダム・日足トンネル越えのコースでしたので道路状況を心配しましたが、無事着けました。日光東照宮では陽明門は残念ながら未だ工事中で見学できませんでしたが、五重塔、三猿、眠り猫、家康の墓所、本殿、鳴き龍、大猷院を見学・参拝しました。二人は神社における身の清め方、二礼二拍手一礼という参拝の仕方も覚えてくれました。



その晩の宿泊地である鬼怒川温泉のホテル万葉亭の近くでは、豪雨の影響で道路脇が崩れていました。

フロントで露天風呂を勧められ、マルチナは少し迷ったようですが、チャレンジしました。先客が二人しかおらず、貸し切りのようでした。マルチナは初めは少々抵抗感があったようでしたが、とてもファンタスティックだと楽しんでいました。

第4日（9月13日）

鬼の大きな絵のある階段と広場になっている橋に行くと、TVで何度か報道された豪雨の為崩れたホテルの露天風呂が見えました。鬼の階段を見ながら、鬼怒川の名前の由来、鬼について説明をしました。



帰路で、富弘美術館は気に入って貰えたようでした。

わたらせ渓谷鉄道の神戸（ごうど）駅ではホームに置かれた列車レストラン（引退した列車を利用）での昼食、地元の名産品を売るボランティア駅長さんに会ったこと等も楽しい思い出になったと思います。



帰宅後、なんとタンスの肥やしになっていた浴衣がマルチナのサイズにぴったり！ 思いがけないプレゼントができました。

夕食は県庁の3階にある和食レストラン「久ろ松」で。鈴木会長夫妻、近藤夫妻と私達で前橋の夕景から夜景を楽しみながらでした。

二人は次のホストファミリーの近藤夫妻のお宅へといきました。

二人との時間を過ごしてみて、日本の若者も彼等のように、数年に1度で良いから2週間くらいの休暇が取れて、国内外で色々な経験が出来るようになって欲しい。盆栽も趣味に出来るような暮らしが出来るようになったらいいな、と思いました。

彼らは東京でも、群馬でも栃木でも出会った人々は皆親切で丁寧で優しいと感動していました。店員さんが、「いらっしやいませ。」「試食は如何ですか？」

「ありがとうございます。」と私達が当たり前と聞き流している言葉や態度を素晴らしいと言っていました。当たり前と思っている日本の良さを教えて貰った気がします。

9月15日、13時頃に京都到着。私の京都の親友である森川葉子さんが、京都の案内を買って出てくれました。彼らがドイツで予約をしてきたゲストハウスは京都御所と二条城のほぼ真ん中の位置にある素敵な古民家だそうです。

金閣寺、竜安寺、天龍寺、竹林等々嵯峨エリアを3時間ほど、森川さんのご主人の自家用車で案内していただきました。忙しくてこれが京都流の案内かと言われたそうです。

9月16日、森川さんのお嬢さんの美智子さんがガイドに加わり、伏見稲荷、清水寺、長楽館、祇園エリア、先斗町、南座（外観のみ）等を見学しました。京都の住人ならではの案内だったと思います。

若者は若者同士、すっかり意気投合しメールアドレスの交換をし、すぐに写真のやり取りもしたそうです。

9月17日、豪雨だったそうですが、参観希望を出してあったので11時から約1時間京都御所見学。森川さんは夕方、頼まれていたトーステンの印鑑を届けに行き大変感謝されたとのことでした。

大変お世話になった3日間でしたが、「私も改めて京都を勉強でき良かった」と言う私の友人でした。京都の皆様にも感謝しています。

5. 独俳（ドイツ語で俳句） — 連載2 （深田 勝弥 記 2015年12月投稿）

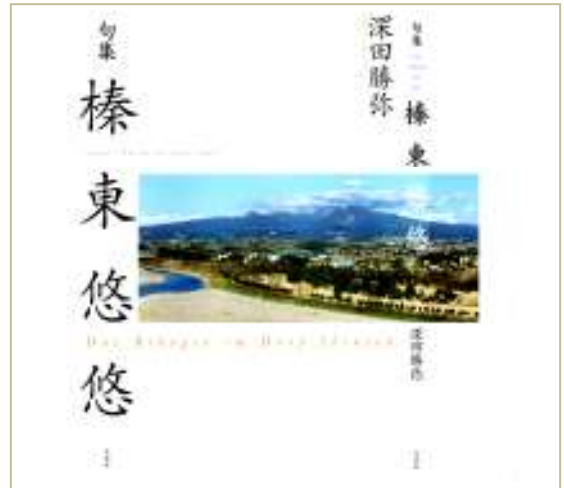
○ 五・七・五のこと

「独俳とは僕の造語で、ドイツ語で書いた俳句です」というと「どういう風にドイツ語にするのか」と聞かれ、「五・七・五にします」と答えると怪訝な顔をされます。

そこでまず、その納得のいかないところから書き始めます。

俳句はその短さが生命です。次に詩ですから言葉のリズムも大切な命です。

日本の詩のリズムは七五調を基本として、既に万葉時代に定着しています。そして俳句についても江戸時代以来五・七・五の音節で続いています。



二千三百年の昔、中国の武人項羽は四面を囲む敵の歌声を聞いて、自分の敗北を悟り、陣中に幕僚を集めて数回歌い舞って、左右の者を泣かせたという話がありますが、歌や舞にはリズムがなくては成り立たないように、詩もまたリズムがなくては共感を得ません。しかし、詩のリズムはその地方や国によって言葉が違うので、そのきまりも違います。中国語は韻脚や平仄によって、英語やドイツ語は韻脚とアクセントの強弱によってリズムを決めます。日本の詩は音節を七五に並べることでリズムをつくります。

音節とは「音声の単位で、単語をできるだけ細かに区切って発音する時のひとつ、ひとつの音」。シラブルとも云いますが「日本語ではほぼ仮名一字が一音節にあたる」と辞書には説明してあります。俳句は五・七・五を合わせた十七音節のまとまりであり、一方では仮名十七文字のまとまりでもあります。小学生が初めて俳句を作る時、音節にあわせて指を折って五・七・五 とまとまれば、音節と文字とが一致した俳句ができたことになるわけです。

ところがドイツ語の音節と文字の数の関係は日本語ほど単純ではありません。ドイツ語では一つの母音の周りに大抵複数個の子音が、絡みついて音節をなしています。そのためにドイツ語の音節を日本語の仮名一字では書き表せず、ごつごつした言葉になってしまうのです。このことがドイツ語で俳句になるのかといぶかしく感じる理由ではないかと思えます。

しかし日本語はすべての音節に文字がついているように、ドイツ語もすべて音節に母音がついています。ですからその母音が5・7・5個であり、それで意味をな

していれば俳句だと分かるわけです。

これから以下に書いていく拙句の音節部には下線を引きますので、これを俳句の一音節と思ってリズムを感じてください。

○正月と春

初雀日だまり子らと共にして

僕の子供3人が庭で遊んでいるときに詠んだ遠い昔の句です。義母が気に入ってくれた思い出のある句です。また昨年夏、この内の一人がなくなり追悼の句ともなりました。

Spatzen zum Neujahr,

新年に雀が

Kommen mit den Kindern aus,

子どもと仲良く遊んでいる

Bei dem Sonnenschein.

日だまりで

(音節の数)

シュパッツェン ツム ノイヤール (5)

コメン ミッ デン キンダン アウス (7)

バイ デム ゾンネン シャイン (5)

春一番からす一斉舞上がる

群馬の春一番は大砂塵

In die Höhe sprengt,

高くへぶつとばす

Der Frühlingssturm auf einmal,

春の嵐が一度に

Die Schar von Krähen.

鳥の群れを

(音節の数)

イン ディ ヘエ シュプレנקツ (5)

デア フリュールィンクスシュトウルム アウフ アインマル (7)

ディ シャア フォン クレーエン (5)

6. 北軽井沢での楽しい親睦会 (近藤 基晴 記)

今年も北軽井沢★でのドイツフェスタの時期がやってきた。ホテルグリーンプラザ軽井沢が主催する催しで、ドイツの観光情報、音楽、食事などを楽しめる。12月に入ると雪の心配があるため11月28～29日の泊まりがけで親睦会を開催した。群馬は車社会のため、普段はアルコール入りの集まりができないため、どうしてもこのような機会での親睦会開催ということになる。開催時期決定が直前だったこともあり参加人員は15名だった。この中にはドイツから高崎経済大学への留学生であるパブロとイナも含まれている。(★群馬県外の方への註：北軽井沢は群馬県内の地域です。)

前橋駅前で2名をピックアップして、会話を楽しみながらあつという間に現地に到着。この冬、11月中旬までは積もるような降雪がなく各地のスキー場では営業開始を延期したようだが、2～3日前に突然11月としては記録にないほどどかっと降雪があり、ホテルに近づくと辺り一面雪景色となっていた。雪を心配して11月にしたのに何ということか。とはいえ、車道は除雪されておりノーマルタイヤでも問題はなかった。

15時集合でチェックインしたあと、わずかな休憩後に懇親会用の部屋に集まった。夕食が17:30からということで、まず留学生もいることから全員の自己紹介から始めた。それまで知っているようで知らなかった会員の裏の一面も知ることとなり、あつという間に時間も過ぎて、夕食前に温泉に入るとなると以外に時間がなく、夕食前は堅いまじめな話をして、食後にゲームなどで楽しむこととした。まじめな話の内容とは、若い世代の人たちの日独交流を進めるために、群馬では何ができるのか、というテーマが中心となった。その一つとして9月に行ったドイツ人少女フルートカルテット”FluTeens”と前橋市の高校生との交流会がいい例として取り上げられた。その発展形として両国の若者の相互ホームステイなどの企画を今後の検討課題としたらどうか、ということになった。

夕食はディナーバイキングにドイツビールやワインなどの飲み放題メニューもあり、ヘルツレさんのアコーディオンによるドイツ民族音楽の演奏が各テーブルをまわってドイツ気分を盛り上げてくれた。乾杯の歌では我々のテーブルがひととき目立って盛り上がっていたようだ。

夕食後はロビーで行われたヘルツレさんのアコーディオン演奏を楽しんだ。日本人の奥様によるカウベルの演奏もあり、お客さんたちも一緒になって身体を動かしたりして楽しいひと時を過ごした。



留学生のイナはアコーディオンを弾いたことがあるとのことで、演奏会終了後にヘルツレさんの指導の下にアコーディオン演奏に挑戦をした。最初は緊張気味だったものの少しずつ慣れてきたようで、笑顔も見られるようになった。



ロビーでの演奏会が終了した後は再び懇親会場に集合してお楽しみ会に専念することとした。まずゲーム形式でドイツに関する知識を楽しみながら身につけようと、二択問題で一問ずつ不正解者は脱落していくというルール。熱戦の末最後に留学生1名と女性会員1名の計2名が一騎打ちとなった。ところが一騎打ちの設問では二人とも不正解で再挑戦となり、結局女性会員が優勝して差し入れのワインを獲得。

次はお待ちかねのビンゴ大会となった。次々と番号が読み上げられ、早くもリーチの声がかかり、続いて「ビンゴ!」の声が上がった。クイズで優勝したかの女性会員は今回もワインをゲット。思わず「一緒に飲もうよ!」と叫ぶところだった。その時に私のカードには真ん中の穴だけ開いて、実力では一つも開いていない状態だった。そのままずるずると最後までひきずってしまい、ついにブービーで終わってしまった。

さあ、これでお開きかと思っていると、ドアをたたく音。さては、大声を出して近隣からの苦情かと観念をすると、現れた顔はヘルツレさんご夫妻だった。お仕事が終わった後ご挨拶に来られたのだった。ここからまたまた大盛り上がり。2月など一部の時期を除いてほぼ一年中イベントでスケジュールが詰まっているようだ。したがってドイツに帰れるのはこのちょっとした期間に限定されてしまうとのこと。日本ではオクトーバーフェストが流行っていて、春にやっても夏にやっても「オクトーバーフェスト」と銘打っているようだ。とにかく楽しめばそれでよし、といういかにも日本的な感覚なのだろうか。

帰り際には、ちょうど4年前にドイツ大使館から贈られた菩提樹が順調に成長している様子も確認できた。ホテルグリーンプラザ 軽井沢さん、今回も楽しいひと時をありがとうございました。



【4年前の植樹祭の様子】

7. デザイナー修行奮闘記 — 連載 7 (井上 晃良 記)

語学学校での生活 (続き)

さて、住居については、私は語学学校が用意した寮に入るようになった。これは日本で語学学校の入学手続き時に入寮を選択できたことによる。現地の入学時手続きの時にたまたま居合わせた日本人大学生に声を掛けたのが縁で彼と同室になることとなった。寮は、元病院の看護師寮だったところで、2人一部屋があてがわれた。12畳ぐらいの広さはあるのか。そこにベッドと簡単な洋服ダンス、机と椅子、テーブルがあるちょっと殺風景な雰囲気である。天井高が日本の建物より高いため、より広々と感じてしまうのはあるかと思う。

通信手段は、公衆電話が1台だけ。朝食は食堂でバイキング形式で用意される。昼食と夕食は各自で調達しなければならない。インターネットの普及した今では考えられないが、当時はそれが当たり前だったので、日本の家族との連絡は、通信費の高い国際電話ではなく、もっぱら手紙であった。稀に日本へ国際電話をかける時は、小銭が沢山必要な寮の公衆電話よりも日中に郵便局の電話を使った。郵便局にある電話なら使用後に請求金額を支払うことが出来るからである。

語学学校の生徒宛の住所は寮ではなく学校となっていた。授業が終わると担任の先生から手紙が配られる。私も家族、学生時代や元会社の同僚、その他色々な知人から手紙が届いた。その返事を記すのは楽しいが、一方で大学時代の友人からの近況を読むと、デザインの仕事を一切せず、ドイツ語だけしか出来ない私は、先の見えない自分自身に焦りを感じざるを得なかったのである。

ルームメイトの大学生とは仲良くなれたので、一緒に自炊したり時には夕食を食べに行ったりと共同生活を楽しむことができた。授業が終わって解散になると自然と日本人が集まってしまうのは仕方の無いことである。日本語が話せる数少ない環境であるからである。そして公務員食堂など安くて栄養バランスの良い食事を提供しているところへと皆で出掛け、その後はそれぞれ三々五々散ってゆくという毎日である。私は、西ドイツに来て見るもの聞くもの全てが興味深かったので、退屈とは無縁であったと思う。特に中心市街地は、美しい街並みの中に、文化的なエスプリを感じさせる様々なモノや場所がある。それは毎日が新しい発見であり、遠く日本の常識が通用しないドイツの様々な事柄も、私には戸惑いよりも新鮮に映ったのである。特にその価値観の違いや物事を選択する時の判断基準について、非常に明確であることが求められるドイツの日常は、堅苦しさよりも清々しさすら感じていた。曖昧さを美德とする日本の文化的背景を否定する訳ではないが、全てをハッキリと明確にする毎日は、自らにウソをつけないということが容易に理解できたのである。また、日々中世から続く美しい街並を眺めて暮らせることや、すばらしく美味しい乳製品を非常に安価に食することの出来る嬉しさは、代え難いと思ったの

も確かである。

一方で食べ慣れた日本の食事が恋しくなることも無かったと言えばウソになるが、たまに中華レストランで食べる醤油味の料理は、私にとって、たとえそれが日本の中華料理と多少味付けが違っていてもホッとする瞬間でもあったのである。逆に初めて口にするトルコ料理やギリシャ料理などは、私には新鮮に映った。今では日本でも普通に食べられるケバブなど、西ドイツが戦後の経済成長を遂げた 1950 年代から 60 年代に掛けて多くの労働者をトルコから移住させたことから、その手のお店は幾らでもあるし、既にドイツでは手軽に食べられる軽食として定着していた。ドイツ料理だけでない他のヨーロッパ諸国の新しい味を楽しめたのは、私の口に合う合わないは別としても、新しい世界に足を踏み入れたような感覚でもあり、食を通しての刺激は私の単調な生活を彩る大切な要素の一つとなったのは間違いない。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 01』に掲載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)

8. 今後のイベントのお知らせ (事務局)

この1年もあっという間に過ぎてしまい、新しい年が始まりました。この一年、ドイツを取り巻く環境の変化では難民問題が大きな問題でした。そんなことから、ドイツに関連した難民問題について少しでも理解を深められるように講演会をしたらどうか、ということになりました。今年度の締めくくりとして下記のような要領で行うこととしました。

日時： 2016年3月12日(土) 14:00～16:00
場所： 前橋市中央公民館3階ホール
講師： 柚岡一明氏(同志社大学客員教授、
前在デュッセルドルフ日本商工会議所事務総長)
演題： 難民問題とドイツの対応
入場無料

講演のあとには質疑応答の時間を十分にとって納得いくまで聴いていただこうと計画しています。

2017年(平成29年)の「第7回ドイツフェスティバル in ぐんま」の展示テーマもそろそろ決めなければなりません。

また、今年はエアフルトからのホームステイの計画もあり数家族での受け入れもお願いすることになり、にぎやかな年になりそうです。

以上